

公立学校で働くってこんなに魅力的！ 公立学校教員として働いて10年

高峯 祐一郎（埼玉県立日高高等学校）

1. はじめに

今現在、教員をやるか迷っている学生さん、仕事をしながらも教職の夢を捨てきれない若者、なかなか採用試験が通らずに眠れぬ夜を過ごす同輩たち、そして希望とはかけ離れた現実の赴任先へ行き少しだけやる気を失いつつある仲間たち、ほんの少しでも公立高校教員に魅力を感じていただきたく筆を握っている。経験も浅く未熟な私の、生意気ではあるがお話を聞いていただければ幸いである。

私は20代を無駄にして過ごしたのか？こんな問いを日々胸にしまいながら若き青春期を過ごしていた。その答えは今現在の私の日々の充実が答えになるだろう。「全てが目の間の子もたちのために繋がっている」「あのときの経験もすべて（おいしい）経験だ」私は自分の経験に対し今では胸を張って過ごしている。どういうことか。私の話からで大変恐縮であるが、埼玉県に生まれ育った私は川越東高校という県立みたいな名前の私立高校を卒業した。一浪までした大学生活で体育会サッカー部に入部した私だが、仲間とともに卒業の桜を同じ気持ちで見ることができなかった。自身の怠慢から留年が確定していたのである。そしてそのまま私は桜を見ながら退学した。3月4月はなにもする気になれず、就職もバイトもしなかった。友人にも親とも話すのさえ苦痛だったが、おなじくニート仲間とつるみ働いたら負けとうそぶいて生活をしていた。こんな私に手を差し伸べてくれたのが母校の高校のサッカー部の恩師で「暇なんだろう、手伝えよ」ということでサッカー部の指導を行うこととなった。このあとここから7年間も外部コーチとして指導に当たることになる。友人たちはサラリーマンとなり、営業で活躍し、経理で愚痴をこぼし、エンジニアとして力を磨き、転職や結婚をする仲間が心底うらやましかった。「俺はなにをしているんだろう」親にも本当に申し訳なかったが、20代半ばにして反抗期を迎え母親のこしらえたハンバーグを踏んづけて家出をしたりもした。実に恥ずかしい体験だ。父親ともよく揉めた。しかしどこかで信頼し、支えてくれている両親の気持ちが一番心に堪えた。

バイトをしながら生活していたが、不安はそんなになかった。楽天的な性格ということも幸いし、また面倒なことから逃げているだけでもあった。そんななか教員を目指そうという気持ちに動いた。理由としては居場所。サッカーコーチという自分が自分でいられる瞬間で本当に一生懸命になれた。グラウンドはこんな自分にも平等で、熱くなれた分優しく包み込んでくれた。学校だ。もう、自分には学校で働くことが最良であると思い込んでそのためには教職課程だ、ということで一念発起し明治大学になんと学士入学という形で政治経済学部で25歳で入学することになった。

2. 臨時的任用とは

前項につづく話である。大学時代にはよく学び、よく遊んだ。20代後半に差し掛かるのだがそれでも本当によく遊んだ。それでもサッカーと同じくらい白熱できたのは教職のゼミである。齋藤孝教授との出会い、齋藤ゼミでの日々、仲間はほんとうに人生での大切な時間であった。この時の大切な友人Kくんから言われたひとことが、教員採用試験前に「今回一次も通らないんなら情熱がその程度ってことなんだよね」とあっさり言われて火が付いたこともあるがこれはまたゼミ時代から10年くらい後の話である。

本当に、本当に教員になると心に決めた出来事があった。在学中に明治大学で夜回り先生こと水谷先生の講演会が開催された。そのとき水谷先生が「世の中のストレスが、弱きものに向かう。」そのころ子どもが事件に巻き込まれることが多く日本中が胸を痛めるような事件が頻発していた。「あっ・・・俺だ。俺が教師になって、日本を変えなきゃ・・・。」勝手にそのときに天啓を受けて教師になることを完全に決意した。

しかしながら、前項にも書いた友人たちがサラリーマンとして苦楽を過ごしているのに対し私は依然として甘い時間を過ごしていた。20代でもバイトをし、バイトをさぼり、旅にも出た。幸運にも大学が終わるときに就職を決めていない私に埼玉県教育委員会から一本電話が来た。「臨時的任用での採用なんですけど・・・」臨時的任用とは病休などの教員の代わりに教員として働く先生のことです。非正規雇用ではあるが、いよいよ「教師」になれる喜びがあった。卒業のころには臨時的任用の登録を関東近県はもちろん、大阪京都あたりの大きな都市圏にも希望を提出していた。大阪でサッカーコーチとしての採用がまともにかけていたのだが、教師の道を当然選んだ。

3. 7年間の講師生活

7年間5校で勤務してそれぞれに素晴らしい先生方がいてどこも楽しい日々であった。県内有数の大規模校では200人くらいの教員がいたときもあった。顧問をしているサッカー一部が埼玉で優勝した時もあった。Jリーグ選手を育てた時もあった。70歳の生徒がいた時もあった。定時制高校で働いた時は毎日が勉強で衝撃でもあった。だんだんと、20代の時の生活がコンプレックスではなく、人にはそれぞれの事情があり、それがその人の歴史をつくるのかなと考えが変わってきはじめた。それなら教員と言えども私は子供たちにとっては人として人生の先輩なのだから、苦しかったことや、いろんな回り道をして生きていけるよ、と自分自身が教科書になるべきだと考え始めた。もしかしたら若い時は高圧的な指導をしてたかもしれない、子どもたちを見下すこともあったかもしれない、臨時的任用という理由で仕事に手を抜いていたかもしれない、だんだんと変化してそしてそのことに少し気が付いたのも教員採用試験が受かったときと同時期だった。

生徒がいて、自分は教師になれる。それならば生徒を本当に大切にしないといけないし、尊敬することが大事だと考えるようになる。

4. 現在の赴任校

私は教員採用試験に合格し、現在の職場埼玉県立日高高等学校に着任した。偏差値35くらいで地元の子が多い県立高校である。一学年4クラスの県内でも一番の小規模校である。私は小さい頃よりサッカーをしてきて、県選抜、国体チームのコーチも歴任していたがさすがに部員2名というのには面食らった。2名のうち一人は初心者、もう一人は骨折中でまともに練習ができない、という環境だった。部員集め、環境整備と頑張れば頑張るほど結果も出ず、いつまでこんなことを続けていくのか、と内心腐りかけた。練習試合ボイコット、バーベキュー大会ボイコット、校内でもめ事ばかりであった。そんな折、偶然にも以前働いていた学校のサッカー部の生徒に会うことがあり、私はその生徒にこんなことを言われた。「よかった、先生がまだサッカー頑張っていて」この時ばかりは車で泣いてしまった。おれは何を迷っているのか、昔の自分に会えたような気がした。

その後、私は幸運が連続した。学校は受検者が増えつつあり、サッカー部も11人そろえることが出来た。そして忘れもしないあの夏。1名のカリスマ的3年生が孤軍奮闘するなか、下級生が先輩のために公式戦勝利したい、と熱望するようになった。内なるエネルギーは教育的効果が高いのは当たり前だ。そして迎えた公式戦で、0-4で負けていて誰もが諦めかけた。ああ、やっぱり日高はダメなんだ……。下級生がそうつぶやいたが、唯一の3年生I君は「俺を見ろ、おれは諦めてないよ」「動けなくなってもおれがカバーするからさ」ここで雰囲気が一変する。結果はその3年生が一人で5点叩きだし、5-4で勝利することができた。満足そうな顔、泣いている選手もいた。相手を気にし、声をかける部員もいた。教育の目標は、「自信をつけさせること」こう言った校長がいたがこのとき実感できた。私の指導者人生でのもちろんベストマッチであった。おそらく日高が公式戦勝利は平成に入ってからほとんどないようだ。そもそも大会にも参加できていないチームだったが、このことが大きな弾みをつけた。現在は男子と女子が在籍し40名ほどの部員数になっている。まだまだできる。

もちろん、こんな楽しく感動的なことばかりではない。担任し、クラスの生徒ともよくやり合った。保護者ともぶつかった。挫折することも多いし、理不尽に屈することも経験した。現在は7年が終わり、2回卒業生を出して今は1年生の担任をしている。

5. 仕事について

私は後輩たちに声を大にして言いたい。「みんな、公立学校で一緒にはたらこう」と。私のゼミの後輩たちをみていると、①一発で公立の採用試験を合格②私立に常勤講師としてひとまず採用③私学で非常勤掛け持ち④公立で臨時的任用⑤大学院に行きながら非常勤というのが多いような気がする。最近では優秀な学生が多く①が昔に比べて激増した感がある。いまだ、どこで働くか迷っているなら迷わず公立学校を目指すことを勧めたい。なぜか。いくつかあるので挙げていこうと思う。まず公立は転勤がある。これを嫌だなあ、面倒だな、と感ずる方もいるとは思いますが「転勤が最大の研修」ともいわれ、とても自己を磨くにはいいと思う。私が日高高校に勤めて、居心地もいいしやりがいあるんだよな、と話

すと家人が「そう思ったら転勤だね。また環境変えないと甘くなるよ」と話してきた。ちなみに家人も公立学校で働いている。新しい職場に行けば当然人間関係も変わる。自分をわかってもらい、他者を理解する。生徒の状況も変わる。普通高校、工業や商業などの実業高校、定時制、男子校や女子高などバリエーションも多い。もちろん転勤した時の年代によって求められることも変化する。どうだろうか、異動・転勤は教師として自分を高めるチャンスではないだろうか。公立学校には研修が多くあり、それもまた教師としてのスキルアップにつながる。教員同士の繋がりも増える。かくいう私も昔は私立で働きたかった。いや、母校で働いてみたかった。母校が私立の方はそう思う方も多いのではないだろうか。母校愛が強い方は心底強く思うだろう。しかし、ある意味ではいつまでも生徒のままという側面もあると思う。デメリットとしては教師として視野が狭くなり逆に教員としての自分に磨きがかからないのではないだろうか。なので、もしも私学の母校で、と考えている方がいればそれは他校で数年勤めてからを私は勧めたい。

公立学校で働き、私学との差に驚くのはやはり運営だ。私の先輩で学生の頃からとても敬愛していたかたの学校に見学に行った時の話だ。その学校は私立でとある取り組みをしていた。その発表を見学させていただいたが、いろいろと質問しても「うーん、上がやってることだから。おれなんて歯車以下だよ」とぼやいていた。もちろん鵜呑みにはできない。謙遜もあると思う。しかし、やはり私立には私立の確固たる理念があり、経営もある。いち教員の意見など通らないのだろう。しかしだ、私は個人的にはそういう環境は息が詰まるような気がする。もっと教員とはクリエイティブで自由さが新しい時代を切り開くのではないか。職員会議では現任校は意見は活発である。若手、超若手もどんどん意見を言う。仕事も若い者にも大きな仕事が任される。なかなか私立だとうにはいかないと思う。なので、私はぜひ若い方には公立校で働くことをお勧めする。次の項では私の話ばかりで恐縮だが現任校に来てからの取り組み、チャレンジを書きたい。

6. 公立学校でのチャレンジ

まず初めにこの項で私の取組を書くが、協力していただいた先生方、チャレンジを許す環境を作ってくれた校長はじめ管理職に感謝を述べたい。本当にどうもありがとうございました。私は現任校での仕事なのだが地歴公民科の教員でサッカー部顧問、1学年担任である。司書教諭もやり、文化祭指導委員長、分掌委員長も歴任した。人権教育担当をしていることもあり、授業や公務以外にも講演会を主催させてもらっている。東京外語大シリア研究会の発表を見に行き、実際にシリア人の方を高校に招いて講演会を行った。また、あわせて生徒たちとの交流会を行い和菓子をつるまい、お茶会、アラビア語講座、百人一首体験などを開催した。この夏には株式会社 RDS の杉原社長を招いてこれからの未来の福祉に関してのお話ということで来ていただいた。杉原社長は私があるときラジオを聞いていてお話に感銘を受けて直接会社に行きぜひ高校で講演を、と図々しくお願いにいくと快諾していただいた。ほんとうに感謝しかない。生徒たちは本当に楽しそうに講演を聴いていた。サッカー部では近隣の中学を集めて大会を開催したが、あるときはスポンサー5社

もつけて70校くらい参加していただき驚いた。高校でも人数が少なく中々大会などに参加できないチームを集めてカップ戦を開催した。校内ビブリオバトルなども運営した。今後やりたいことは避難訓練をもうすこし変化させたい、また探究学習の担当となりここではまだ書けないが、繋がりの中でのなるべく海外に目を向けられるような取り組みを考えている。公立学校ならではの自由さ、コネクションであると本当にこの環境に感謝している。なかなか私立ではここまで自由には難しいのではないかと思うが、いかがだろうか。自分が取り組んできたことは結構そんなに特別でもなく公立学校だとこのように頑張れば場を与えてくれることは多い。これから教員を目指す皆さんには、いいモチベーションになっていただけると幸いである。

7. おわりに

サラリーマンの友人と飲んでいるとよく聞かれることがある。モンスターペアレンツってすごいでしょ？偏差値30ってどんな生徒？定時制ってみんな働いているでしょ？教員でブラックなんですよ？・・・教師をとりまく環境も変化しつつあり、またメディアも注視している職業でもある。これから大学入試、少子化、学校をめぐる問題は尽きない。それでも目の前の生徒を成長させる、人生の伴走者たりえるこの仕事はやはり聖職であり、誇りをもち働き続けたい。教科指導力や国際的視野、話し方や自身の見え方だって必要で当然スタミナ、忍耐、もちろん必要である。クリエイティブさよりも、雑巾がけや我慢の時間が役に立つこともある。ときに理不尽や困ることも多い。でもわたしはこう考える。保護者も同僚も上司も、みな昔は生徒だった。そのことを考えたら、やはり共に考え、悩み、成長する仲間ととらえていいのではないだろうか。現任校に不満がある若手教員や、すこしばかり教員になることを怖がっている学生さん、ぜひ未来は明るいので共に働きましょう。最後に、私が一番好きな教師はもちろん坂本金八である。一番好きなのは腐ったミカンの方程式で有名な加藤が、警察の取り調べを受けて出てきて、金八先生に顔を張られて「貴様たち俺の生徒だ 忘れんなよ」といって強く抱きしめられるシーンである。たまにこのDVDを観てテンションを上げる。私は体罰はしないが、なにかあっても生徒のそばに寄り添い、熱く見守る、こんなスタンスも忘れてはならないようにしたい。これでこの原稿を終えたいが、最後に一番感謝したい方がいる。明治大学教職課程高野先生である。今回明治大学教育会で講話させて頂いたのも、高野先生に推していただいたからであるが、「やってみたら？」と本当にやさしくソフトに肩を押されて一歩踏み出せた。こういう優しく勇気を持たせてくれるのも本当に教育だと再発見させていただき、また私のような教員としてはアウトローに場を与えていただき感謝しても尽くせない。ここに謝辞をもって文を終えたいと思う。ありがとうございました。